

奥村友美ピアノリサイタル

ソナタ ハ長調 Hob.XVI 50.....ハイドン
ハンガリー狂詩曲 第12番.....リスト
「鳥のカタログ」より第13曲 ダイシャクシギ.....メシアン
「幼児イエスに注ぐ20の眼差し」より第13曲 降誕祭.....メシアン
謝肉祭 Op.9.....シューマン

浜松出身の
演奏家シリーズⅦ

四季²⁰⁰¹コンサート

2001年5月11日(金) 6:45PM

会場：浜松市教育文化会館

主催：浜松音楽友の会

プロフィール

奥村友美 (ピアノ)

1978年浜松に生まれ、4歳よりピアノを始める。1990年第44回全日本学生音楽コンクール東京大会小学生の部入選。1991年第15回ビティナピアノコンペティションE級全国大会奨励賞。1992年第46回全日本学生音楽コンクール全国大会中学生の部第1位。1994年静岡大学教育学部附属中学校を卒業し、東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校に入学。浜松にてリサイタルを行う。1997年東京芸術大学に入学。ジュニア・ジーナ・バックアウワー国際ピアノコンクール第4位。第8回やちよ音楽コンクール第2位受賞。1998年、ポーランドで行われたパデレフスキ国際ピアノコンクールにおいて日本人初の第1位を受賞。受賞を記念してポーランドとクウェートにてリサイタルを行う。1999年いさだ管弦楽団とショパンのピアノ協奏曲第2番を共演、また校内演奏会にて芸大オーケストラとも共演。2000年第4回若手奏者のためのコンペティション・デュオ室内楽部門第1位。2001年、東京芸術大学卒業。夏からドイツへ留学予定。読売新人演奏会出演。これまでに安倍紀子、中島和彦の各氏に、現在播本三恵子、倉沢仁子の各氏に師事。

奥村友美
ピアノリサイタル



TOMOMI OKUMURA
PIANO RECITAL

●ハイドン／ソナタ ハ長調 Hob. XVI 50

ハイドンの最晩年のこのソナタは2度目のロンドン滞在中に作曲され、当時非常に有名であったピアニスト、テレザ・バルトロフフィに献呈されている。ハイドンの音楽の持つ透明な美しさ、明るくも決して浅薄ではない優美さ、そして時折現れるバロックから引き継がれた端正なメランコリーに加え、落ち着いた重厚な響きの中に、モーツァルト、ベートーヴェンに繋がる先駆者としてのハイドンの姿を見る事ができる。第一楽章は、3つの音の下降音形に始まり、軽やかな中にも落ち着きが感じられ、構成的に大変密度の高い楽章である。第二楽章は、ゆったりとした優雅さの中に、既に古典派の枠を越えた重厚さが漂い、第三楽章は一変して軽快な狩りのリズムによる簡潔な音楽となっている。

●リスト／ハンガリー狂詩曲 第12番

ロマン派中期以降を通じて最高のピアニストの一人と言われたリストは、華やかな超絶技巧を駆使した自信の技巧を活かし、祖国ハンガリー民族音楽を素材とした「ハンガリー狂詩曲」を全部で19曲残した。これらの曲はハンガリーの民族舞踊のチャルダッシュの形式に基づいており、ゆっくりとした序奏とそれに続く速い部分のコントラストが特徴である。その中でも特に名作と言われる第12番は、1839～40年頃に作曲され、同郷の有名なヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムに献呈された作品である。

●メシアン／「鳥のカatalog」より 第13曲 ダイシャクシギ

フランスのみならず、今世紀を代表する現代音楽の大家として有名なメシアンは、シェーンベルクに端を発する第二次ウィーン学派が、無調音楽を目指したのとは異なり、ドビュッシーやラヴェルといったフランス音楽の流れに、独自の旋法（音階）やリズムを加え、あくまでも響きの美しさや表現力を失わない音楽を目指した。メシアンはまた、野鳥の鳴き声の熱心な収集家でもあり、鳥の鳴き声とその鳥の住む環境を音楽的に表したのが「鳥のカatalog」（1958）である。この曲では、鳥の啼に住むダイシャクシギの鳴き声に始まり、海を飛ぶさまざまな海鳥の鳴き声、砕け散る波の音や波のうねりが表現されている。やがて灯台から「力強く陰鬱な音」のサイレンが鳴り渡ると海は霧に覆われ、薄暗い闇に包まれていく。再びダイシャクシギの鳴き声が聞こえ、やがて遠ざかっていく。

●メシアン／「幼児イエスに注ぐ20の眼差し」より 第13曲 降誕祭

自らが優れたオルガン奏者であった若きメシアンが、イエスにまつわる、聖母、十字架、精霊、教会など20の情景を表したもの。宗教的な題材に基づいてはいるが、メシアンは「虹のように光り輝き、繊細で感覚に心地よく訴える音楽を目指した」と述べている。第13曲降誕祭（クリスマス）では、イヴに教会の鐘が鳴り渡った後の賑わう街の様子や教会に集う人々、そして礼拝の様子などが現代的だが美しい響きの中に描写されている。

●シューマン／謝肉祭 Op.9

1834年、シューマン24歳の年に作曲されたこの曲は、大掛かりな規模をもつ彼のピアノ曲の中でもとりわけ華やかな作品として有名である。この頃、彼はエルネステ・フォン・フリッケンという女性と婚約しており、彼女の故郷Aschと言う町のアルファベットを音名に書き換えた4つの音、A, E, C, H, (イ、変ホ、ハ、ロ) が全20曲のほとんどに使われている。それぞれの曲のタイトルは、シューマンの置かれた状況、エルネステ・フォンへの思いや象徴的に表された音楽会の状況と交友関係を表しており、作曲家の内面の音楽的な表現となっている。

1: 前口上

2: ビエロ

3: アルカン (進化)

4: 高貴なワルフ

5: オイゼビウス (穏やかな議論を書く時のシューマン自身の筆名)

6: フロレスタン (批判的で激情的な議論を書くときの筆名)

7: コケット (嘲びる者)

8: 応答

9: 蝶々

10: ASCH SCHA (断る文字)

(※ダヴィッド同盟＝シューマンが空想で作った理想とする芸術家の集まりのこと。)

11: キアリーナ (ダヴィッド同盟の中でのアララの名前)

12: ショパン

13: エストレラ (エルネステ・フォンへの夢と言われる。)

14: 再開

15: バンタロンとコロンビース (イタリア音楽の進化とその女弟子)

16: ドイツ風ワルフ (バグニニのバロディ)

17: 告白

18: プロムナード (散歩道)

19: 休息 (閑居の意)

20: ペリシテ人 (俗人) と闘うダヴィッド同盟員

この謝肉祭は数年後の「ダヴィッド同盟舞劇集」と対をなす曲であるが、シューマン自信は前者を「仮面舞踏会」、後者を「素顔の舞踏会」と述べている。謝肉祭では彼自信と彼を取り巻く仲間が謝肉祭の陽気な喧騒の中に表されている。